

## ワイルドとフィリップ・シドニー ——詩を弁護した2人の詩人——

岩永弘人  
(東京農業大学助教授)

この研究発表においては、ワイルドとフィリップ・シドニーの関連を、2つの観点から考えてみた。1つ目はこの2人の詩人の〈芸術・自然〉観の共通性であり、もう1つはワイルドが匿名で書いた「2つのシドニー伝」(『ペル・メル・ガゼット』、1886年12月)という書評に見られる、ワイルドのシドニーへの愛着である。

### (1) シドニーとワイルドの自然と芸術

2人の詩人の考え方に共通しているのは、芸術の、自然に対する優越性である。ワイルドは『虚言の衰退』の中で、芸術が鏡ではなく、ペールであると定義している。それは「どんな林地にもいない鳥や、どんな森も知らない花々」を持っている、と。一方フィリップ・シドニーは『詩の弁護』の中で、詩以外のもの——たとえば哲学や歴史——を、自然という対象を借りた、自然から離れる事のできないものと想定したあとで言う。「ただひとり詩人のみは、そのようないかなる隷属的立場にも縛りつけられることを潔しとせず、彼自身の創意発明の湧き上がる力によって高揚し、結局はもう一つの自然と化し、事物を自然が生み出すよりも一段と見事に作り、あるいは自然の中にはかって存在しえなかったような形姿をまったく新たに作り出すのであります」。これはまさに、昨年上梓された『オスカー・ワイルド事典』の「序論」(41頁)で、川崎淳之助名誉会長が述べられている「神話を作り出す力(Mythopoetic Faculty)」が意味するところだろう。「何もない虚の時空間の中で、一つの物語を創り出すということは、純粋な想像力によってのみ可能な、だが極めて困難な仕事である」。この困難な仕事を成し遂げることができるのが、真の詩人であるという事になる。

### (2) 「2つのシドニー伝」のワイルド

この書評で扱われている対象は、1つはJ. A. シモンズのものであり、もう1つはエドモンド・ゴスのものである。「2つのシドニー伝」では、まずシモンズの本(*Sir Philip Sidney, English Men of Letters* シリーズ、1886年)について賛辞——特に彼の歴史に対する造詣の深さ——が述べられ、それに比べてゴスの方(これは『コンテンポラリー・レビュー』の1886年11月号に掲載されたもの)については、事実の記述と把握に正確さを

欠く、という批判がなされる。しかし、一方シモンズの方には、シドニーの文学に対する審美的な評価が欠けていると指摘する。

このような文脈の中で特に面白いのは、ワイルドが、シモンズもゴスも「シドニーに対するこれまでの偶像崇拝的なものを脱しようとしている」とコメントしているにもかかわらず、彼自身もかなりシドニーを神格化して見ているという点である。イギリス・ルネサンスの詩人の中で、シドニーほどのカリスマ性をもった者は他にはいなかった。しかし、彼が時期尚早に亡くなった時の国民の悲しみは詩人シドニーに対してというより、むしろ軍人、人間シドニーに対してのものであった。ワイルドは言う。「シドニーにとっての芸術は、彼が書いたものではなく、彼の人生自体にある。」と。(実は、1881年、ワイルドが初めてエドモンド・ゴスに会った時に、ワイルドが言った言葉もこれに似ている。「私は文学関係の人に失望したことは1度もありません。彼らはとても魅力的ですよ。問題は、彼らの書く物です。」)

シドニーのドラマチックな死は当時の人々を深く悲しませ、エドモンド・スペンサーをはじめ、多くの詩人たちが彼の追悼詩を物したが、19世紀末再び、彼はワイルドによってこう語りかけられたのであった。「アルンヘムで彼[シドニー]が死んでから3世紀が過ぎ去ったが、今だに我々は彼の高貴な人柄の魅力を感じることができし、すべての人達をして、彼を愛さずにはいられなくさせた魅力のなにがしかを看とる事が可能である。「新たな理想」(new ideals)というものが、我々の現前に現われてしまい、人生はたぶん、彼の時代に比べて、より複雑で理解しがたいものになってしまったのかもしれない。しかし、それでも彼を我々の心にしまっておくことには価値があるのだ。彼、エリザベス朝宮廷の英雄であり、ステラへのソネットを書いた詩人、ズットフェンで傷ついた兵士に自分の水を与えたクリスチャンの貴族、である彼を」。

ワイルドの憧れの詩人への想いは、その詩に対する憧れにとどまらず、その詩人の人生への憧れへと進んでいく。シドニーも、キーツ同様、ワイルドにとって大きな意味を持つ詩人であったと言えるのではないか。